

## 「フランス語の関係的な複合名詞：構文文法的アプローチに基づく分類の試み」

古賀 健太郎 (福岡大学)

Couteau à beurre のような[N1 + PREP + N2]や dictionnaire électronique のような[N1 + AdjR (関係形容詞) ]、さらに dictionnaire papier をはじめとする[N1+N2]はいずれも、N1 の指示対象の下位概念を「説明 (EN: describe)」しながら「名付け (EN: name)」る機能を持っている。これらは先行研究において关系的(EN: relational)な複合名詞と分類され、produits phares (主力製品群) のような属詞的(EN: attributive)なタイプとは性質の異なる構造であることが指摘されている(cf. Villoing 2012, Arnaud 2016)。

関係的な複合名詞の内部構造に着目すると、コネクターを含むものとそうではないものに大別できるが、コネクターの有無が構成素の組み合わせにおける潜在的可能性の大小にも密接にかかわっていることが示唆される。例えば Couteau à beurre のようなタイプの複合名詞は、[N1+à+N2]のような、あらゆる語彙素の組み合わせが想定できるモデルに基づいて形成されている可能性がある。

一方で、コネクターを含まない dictionnaire papier のようなタイプでは、そのような自由度の高いモデルを想定するのは難しい。実際には[N1+ papier]という、N2 が事前指定された形成モデルを想定するのが妥当である。また dictionnaire électronique のようなタイプの場合には、そもそも関係形容詞としての形式が存在しているかどうかの問題となる。

本発表では現代フランス語におけるこのような語形成上の傾向を整理した上で、関係的な複合名詞がどのような形成プロセスによって成り立っているか、Booij (2010)で提案されている構文文法的アプローチを援用しながら、形成モデルのあり方という観点で改めて分類することを目的とする。

分類においては、コネクターの有無、構成素の組み合わせ自由度、主要部の位置といった要因を考慮しながら、それぞれの形成モデルの具体像を明らかにしていく。また、一般的な文法規則から逸脱した構造を呈している形成モデルがあることにも注目し、これらの生産性の高さを説明する上で、構文文法的アプローチが有効であることについても指摘する。